自己乃至意味空間の構造に関する研究 3

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山岡, 哲雄, 川口, 悦子, 須江, 昭子, 善光, みな, 上瀧, 小百合 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/657

自己乃至意味空間の構造に関する研究III

——言語表出と意識体験の確立——

山岡哲雄・川口悦子*・須江昭子*・善光みな*・上瀧小百合*・木元真由美*

Studies on the Structure of Self or Meaning SpaceIII
—Language-Expression and Establishment of Consciousness-Experience—

Tetsuo YAMAOKA, Etsuko KAWAGUTI*, Akiko SUE*,
Mina ZENKOU*, Sayuri WATAKI* and Mayumi KIMOTO*

1．象徴と意識

善光（1999）は、意識化の過程を象徴化過程と象徴表現から明らかにしようとしている。そしてそのためには、象徴の定義を明確にすることから始める必要があると考えた。

初めに人は記号を用いて、さまざまな対象を表すが、その際用いられる記号の1つに象徴がある。一般的に象徴は表面的な意味とは異なる意味をも引き起こす特殊な記号であり、時には神秘性を帯びて語られることもある多義的な概念でもある。善光は、初めにこの象徴がこれまでの心理学及び関連諸領域で、どのように定義されているかについて文献的、理論的研究を行い、次に象徴の再定義を試みようとした。

1－1．象徴の記号論

神保（1982）によると、象徴は矛盾をはらんだ多義的な記号であるという。象徴に根源的な矛盾した結合は、人間の内在的原因によるものであり、それ故に象徴には生命的、内面的、直観的、感情的、謎的、開示的性質がある。一方、その形態は具象的であるという。ラルース言語学用語辞典では、直接知覚不可能な現象を示す指標（直接知覚可能な現象）の内、感覚に直ちに訴えない事物を示すものを象徴と見做している。その特徴は、意図的に生産され、しかも慣習的で明示的なところであり、また形態は、神保もいうように、具象的であるという。Peirce, ch.S.（1958）によると、象徴は純粋に慣習的な関係で結ばれており、社会的な約束事によって成立する記号である。岡本（1995）は、あるもの（所記）を元来それとは無関係のもの（能記）で表す場合の記号を象徴としている。元来所記とは無関係である能記は、心的表象を介して所記に結びつけられるのだという。以上の見解をまとめると、象徴形成は一種の心理作用であり、象徴は結合するはずのない2つの対象が心理作用によって結合した記号であるということになる。そしてこの結びつけられた2つの対象が一見無関係であり、且つ矛盾して見えるために、象徴は謎的、神秘的なものとしてと捉えられる傾向があるのだと考えられる。

1－2．象徴の形成過程

Werner,H. と Kaplan,B.（1974）は、象徴の形成は一対のシェマ化－フォルム形成過程に基づいており、象徴を認知的側面から捉えるべきだと主張した。先ず、人間の扱うあらゆる対象は、シェマ化を通じて有機体の状態（相互に折り合わされた感情的要素、姿勢的要素、心像的要素、感覚的要素）にとけ込み、対象として確立され、認知されるようになる。象徴は、一方で指示対象となる対象がシェマ化を通じ有意味な対象として認知に至る過程を進み、他方ではシンボル体となる対象が意味を表現するパターンとして同様の過程を進行するなかで、指示対象とシンボル体とが共に有機的に類似した状態、或いは同一の状態に根ざす（とけ込む）と

平成11年9月7日受理
* 金沢大学大学院教育学研究科

き、それらが結びつきシンボルが形成されるのだという。

1-3．イメージについて

イメージは一種の認知事象である。水島ら（1983）は、イメージは対象のシンボル化として成立し、特有の象徴的な意味を持つと述べている。また、大石（1983）は、イメージが象徴であることを次のように説明している。例えば、犬をイメージするとき、それが如何にリアリティを持っていようとも決して実在の犬ではあり得ないが、犬のイメージによって、実在の犬について思いを巡らせることができる。この意味で犬のイメージは実在の犬を意味する記号である。成人の思考に代表されるような表象的認識は、総て記号的な機能を前提としている。この記号的機能はサインとシンボルに分けられ、サインは能記と所記との関係が規約的、社会的であり、一方シンボルは能記と所記との間に有縁性をもち、社会的または個人的であるという。この意味でイメージにはシンボル（象徴）としての性質があり、従ってイメージは象徴との関わりが深く、象徴の新しい定義を目指す際に、欠かすことのできない要素であるといえる。

1-4．象徴の表現様式

ある特定の語が有生または具象という特徴によって規定されているのに、その表現において無生（もの）、或いは抽象という特徴がこれに付与されるとき、その語は比喩的意味をもつ。このような機能を持つ比喩表現は一種の象徴であるといえる。比喩表現には、明喩、隠喩、換喩、提喩、擬人法という基本的パターンがある。筆者は言語それ自体も、機能的に見て象徴と見做し得ると考えているが、このように考えると比喩的表現は二重の象徴機能を果たしていることになる。

このような捉え方はWirth,J.（1996）の視覚造形における象徴の捉え方と類似している。彼は視覚造形における象徴の内、対象と直接結びつき、さらにその結びつきが模写によらない、或いは模写を超越している記号を直接的象徴と呼び、象徴化（模写を超越した連結）が直接的象徴に接ぎ木されるときに生じるものを間接的象徴と呼んだ。Wirthは間接的象徴は絵画の比喩表現に相当するものであり、言語と同様に幾つかのパターンに分類されるとした。

ところで、視覚造形を含む芸術は象徴と関連が深い。神保（1982）は象徴と芸術について、自然的所与としての材料と精神的な創造形式という異質の両極的契機の結合という点から、その根本は象徴にあると述べている。またそれ故に芸術は、象徴の指示、表示と開示、代表機能を持ち合わせているという。芸術の一分野である音楽は、音と沈黙を素材とする時間的な芸術であり、一個の独立した小宇宙的世界を形造っている。つまり音楽は音と沈黙を初めとするさまざまな異質の両極的契機の統一体であり、そこに音楽性が発揮されるという。神保は音楽を例として挙げているが、彼の説に即して言うと、芸術の諸分野は、芸術における異質の両極的契機とその分野特有の異質の両極的契機とが絡み合った統一体であり、結合したものとして、それぞれの分野としての機能を果たしていると言えよう。

1-5．象徴と人間性

分析心理学では、象徴は無意識からのメッセージとして捉えられ、象徴の意味を適切に解釈することによって心の問題の原因を探り当て、心的障害の治療にも役立てられている。分析心理学の基盤を築き象徴を重視したJung,C.G.（1952）は、象徴を単に個々人のものとして捉えるよりも、むしろ普遍的に時代を超えて共通する側面を重視し、時代の異なる様々な象徴の現象形に類似した意味を見出した。そして、さらに、意識化の一形態として機能する象徴の役割やそのメカニズムについて無意識の元型を象徴の根本に据えた独自の理論を展開した。Jungの弟子であるJafee,A.（1964）は、美術作品に

見られる象徴としての石と動物と円について解釈している。それによると、石は自ら語るものであって自然のままの姿に精神が反映される。動物は人間の中にある本能的心性を表わしており、円は自己の象徴であり、生命の究極的な全体性を指し示しているという。

また、絵画を主とする現代美術作品（ここでいう現代美術とはJafeeの研究発表当時の現代美術である）には、無意識からのメッセージとして働く象徴に、現代人の持つ、精神と物質、本能と理性、無意識と意識との間の深い裂け目が現れており、さらに無意識が優越する危険な状態や深い裂け目が統合される様子等が現れていると解釈している。無意識が優越する危険な状態とは、すなわち精神分裂病様の状態であるが、偉大な作品といわれるものの中には、そのような心の様相が描かれているものが数多く存在する。その代表例であるMunch,E. の石版画「叫び」について、宮本（1966）は聴覚的な幻覚的意識を母体として制作されていると主張し、１つの線が次の線へ微妙に波及し、波及を無限に続けていくことによって全体としてのリズムを生み出していると述べている。こうした石版画が聴覚的幻覚の世界を表わす適切な材料として選択されたのだと述べている。宮本の考えでは、聴覚の世界を視覚的に表わすという異なるモダリティーの対応という点で、共感覚の問題からも興味深いものである。一般の芸術の分野に限らず、宗教芸術（特に宗教美術）においても、象徴について論じられることが多い。西村（1986）は仏教における造形について、釈迦や仏に対する畏敬の念から、その姿を直視せずに象徴表現が用いられると述べている。仏教に限らず、他の宗教美術においても象徴表現が好んで用いられるが、これも同様の精神作用が働いているためと考えられよう。この類の象徴は意味されるものと意味するものとの関係が恣意的であることがしばしば指摘されている。仏教（宗教）における造形は単なる形象造形ではなく、そこから学びとる神髄の象徴的形象化でなければならないという。従ってそれはその神髄を探し当てた者によってのみ可能なものとなる（湯浅，1982）。厳密に言って宗教芸術はそのような人々によってのみなされるものである。同様の理由から西村は仏教における経典や仏画を写すことに意義がある述べており、その際、また作仏の際にも、仏について探求することが大切であり、それが写経等の本来の目的であるのだと述べている。もっともこの関係は、宗教芸術に限らず一般の創造活動についても言えることであり、実在の探求に成功し、自己実現を達成した者によってのみ真の芸術作品が完成され、鑑賞するもの1こその神髄を伝えることができるという（山岡、橋本、池田，1990）。

1－6．象徴の新しい定義

以上「象徴」に関わる様々な領域に関して文献的検討を行い、象徴概念がどのように定義されているかについて比較、検討してきた。象徴概念は、各々の研究者によってその受け止め方が異なり、或いは領域毎にその領域の事情を反映して、微妙に異なる定義づけがなされていることが多い。従ってそれぞれの定義の仕方によって象徴の性質や意味が異なり、研究上混乱が避けられない。そこで、多様な研究領域をカバーする一般的な象徴の定義が必要とされる。本論では、今後筆者が進める象徴の心理学的研究の基礎固めとして、これまで提出され或いは用いられてきた象徴概念を再検討し、象徴であるための基本的条件を整理してきた。その結果を要約すると、象徴の基本的要件として次のような要因を考えることができる。すなわち、象徴はその記号性に注目すると、記号化における「意味されるもの」と「意味するもの」との関係の中で捉えうるものとなる。そして、「意味されるもの」が外延的性質を持つ場合と、内包的性質を持つ場合とでは、象徴化の様式は異なってくる。つまり①意味されるものが外延的で、意味するものへの記号化を直接的になし得る場合には、直接記号化することが可能であるにもか

かわらず他の意味を表わす別の記号によって現わされるときに象徴化が生じ、これに対して②意味されるものが内包的であって、意味するものへの記号化が直接なし得ない場合には、別の意味を表す記号を用いざるを得ない。そこで、必然的に象徴化が生ずる。一方③指示されるものが外延的であれ内包的であれ、そのいずれであってもこれを表すために創造的な記号で表す場合も象徴と言われる．この３番目の象徴化は前者２つの象徴化とは幾分性質が異なり、「その物自体」に記号的名称を付けるという機能を持つ。我々の意識のあらゆる表象が基本的にはこの機能によって生成されることを考えると、象徴化は記号化、意識化の基本要因であると考えられよう。いずれのタイプの象徴にせよ、象徴は意味するものを託された対象であり、対象のもつ本来的な性質や意味によって、或いはそれらに加えて、象徴的な意味が表現されるのだといえる。このようにして象徴化された個々の象徴表現は、時間の経過によって２つの方向への変化を遂げる。１つは初めこそ意味されるものを代換指示するものとしての「象徴」の性質を保持しているが、やがて日常化し一般的意味として受容されるようになる。例えば、「ハト」はかつては鳥類の１種としての名称であったが、次に「平和」の「象徴」ともなった。そして現在では「平和の象徴」というよりも「平和」そのものの意味に使われ始めている。やがて「ハト」は辞書的に「平和」と同値になり、「平和」という意味を託された象徴というよりは名詞化する運命にある。もう１つは、それは恐らく「象徴」なのであって、その「意味するもの」としての象徴によって「意味されるもの」がかつては明確に人々に理解されていたに違いないのだが、今ではそれは忘却の彼方にあり、それが何を意味しているのか不明になっているようなものである。そのようなタイプの象徴によって「意味されるもの」の解釈が、現在分析家達によってなされているが、それには分析家の深層が投影されており、且つ本来の「意味するもの」である保証は少ない。従って、象徴表現の心理学的研究は、上述した枠組みの中で明確に「意味されるもの」と「意味するもの」との関係を構造的に明示できるものを扱うべきであろう。

２．発話と意識化過程

須江は、人の発話過程のメカニズムを解明し、これによって発話に伴う意識の流れ及び意識化過程のメカニズムを説明しようとしている。そこで須江は、発話過程の数理的モデル化を意図して、子供の言語発生過程、発話のモデル、発話と思考及び意識化過程へのアプローチに関してこれまでに解明された事実の検討、提出された主要モデルの検討を行った。そして、この方向へ研究を進めるためには、所謂規範統語法の背後にある普遍的統語法の発見とその解明が必要であること、現段階ではカオス力学系における数学的性質及び処理法が、発話の意図の展開と統語配列との関係の解明に最も大きな可能性を含んでいると結論している。

２－１．発話の発生過程

Lenneberg,E.H.（1974）は、言語習得過程の内容（いかにして言語が習得されるか）について論じている。Lenneberg によると、言語習得において、習得されるのはパターン乃至構造であり、それらを構成する要素ではないのだという。つまり、原初的な１語発話における単語は、音韻、統語、意味のいずれのレベルにおいても成人のそれとは全く異なる機能を果たしている。最初期の単語の意味構造は過度の一般化がなされており、その内容は表出されたものに比べてより広範囲の対象を示している。しかしこれは指示対象のグループが成人の言語に比べて分化されていないためであり、単語と「もの」の間には「了解可能な論理」が存在しているので、原則的に成人と同じことをより一般性の高いレベルにおいて行っているということにすぎない。従って、１語発話は原初的な統語構造の単位であり、原初的な文であり、そこには文法

の萌芽が含まれていると考えられる。2語発話文が可能な段階に入ると、最初期の包括的なカテゴリーが、機能的に異なった2つのカテゴリーに分化していく兆しが窺える。特に、2つの単語の内、一方が他方よりも高い生起頻度をもち、文法的な演算子として働くように見受けられ、もう一方は多様な意味を持つ語彙のストックから選択されたような発話が見られるようになるという。

Braine,M.D.S.（1963）はこの演算子となる語を軸語と名付けた。このような文では、あたかも発話全体が軸語の「まわりをめぐって」作られているような様相を呈する。そして3語発話文では統語構造はさらに複雑なものとなり、カテゴリーの分化が一段と進むのだという。句構造化が個体発生する経過は、文法的カテゴリーの分化の過程であり、語彙形成における意味の分化や、音素構成における音韻構造の分化の過程も同時に進行するという。このような分化は何も言語に限ったことではなく、あらゆる発達の印とも言えるものであり、この分化は成人においては特定化ないし精密化の過程となって同一原理の繰り返しによる回帰構造や文の要素の分化の繰り返しにより生じる繰り込み依存構造をもたらすようになるという。言語ばかりでなく、行動の他の多くの側面においても、全体の把握から部分へという経時的分化と、その逐次全体的統合へという発生的展開がみられる。つまり言語も行動も「全体のプランがまず生じ、それが分化によって各部分に分かれ、時間的な統合作用の結果、運動（または思考）が順序づけられる。」(Lenneberg, 1974. p 320. 佐藤，神尾訳）のだという。従って、回帰構造及び繰り込み依存構造を生起させる句構造化の体制は「自然現象」の一種であると考えられるが、この行動を現実に遂行するためには、特定の認知上の、従って生物学的な適応作用が必要となる。この統語構造を、Lenneberg は、機能的なカテゴリーからなる1種の計算法であり、そのカテゴリーは最も包括的なものから個物に至る階層的な体系をなして配列されていると考えている。

鈴木（1987）　によると、文法とは我々がことばを話したり、理解したりする際に使用している規則の集まりであり、あくまで心理的なものであるという。つまり幼児でも各発達段階において自分の習得した文法に適った文を作り出す能力と同時に、自分の作った文が自分の習得した文法や辞書に照らして正しく表現されているかを判定し、誤りがある場合は直ちに修正する能力を持ているという。こうした能力の背景には、自分でことばを発しながら、同時にそれを聞きチェックするモニター能力、すなわちことばに関する判断能力がると考えられる。柴谷（1978）はこれを「母国語に関する直感・内省的知識」と呼んでいるが、Slobin,D.（1975）は、これを「幼児が発話を理解し、文法を構築するために使用し、かつそれを発達させる情報処理の装置」であり方略（strategy）であると主張し、幼児が自分自身で自分の意識や注意を方向付けるために行う自己教示としての「操作の原理」と定義した。　発話の述部、特に動詞の活用やその後に続く助動詞や助詞の種類が増え表現が多様化することを文法的発達とみる立場に Fillmore,C.（1975）の格文法理論がある。Fillmore は文の構造を「命題」と「モダリティー」に分けているが、命題とは文の情報的意味を表す部分であり、その他の部分がモダリティーであるという。これに対して McNeill, D.（1990）は、言語に対する、より通時的で統合的な視点を提供している。McNeill の考えでは「理解する」こととことばを話すということとは1つの連続体上にあり、変形の連続的な過程が両端を結合している。思考は理解という場面ではより包括的でイメージ的であり、話すという場面では、それはより文節的で統合的となる。この連続体は時間軸上で存在し、より初期の部分がより後期の部分へと変化していくような、性質を持っているという。ここで時間は”深層”時間と”表層”時間とに分けられて

いるが、深層時間は文が内的に発達するための時間とされ、思考が急速に或いはゆっくりと継続して変形を受けるようなものであるという。これに対して、表層時間は、我々が話の流れの中で直接知覚する外的な時間を指し、話をする際には一種の思考が（社会的に構成された統語的な）言語信号の媒体の形で聞き手に系列的にコンスタントなスピードで提示されるようなものであるとした。

2－2．発話のモデル

単一の言語活動は、恐らく「単一の心理状態の変化」を観察可能な最小の時間単位であり、また我々の言語行為が文法的に適格か否かの厳密な基準を保つ最小の時間間隔の1つであると考えられている。個人の活動を他人によって解釈可能とするものは、言語の慣例であるが、この慣例は時間を超越しており、個人の視点からは如何なるコンテクストも伴わない。しかし現実の言語活動はコンテクストを伴い、リアル・タイムに生じている。心理言語学の対象は、このような深層と表層とを結ぶ「変形の連続的な過程」であり、それは私的かつ連続的に流れていく個人の思考が公共的かつ伝統の産物である社会的慣例—言語自体—と如何に関係しているかを研究する科学であるという。言語学の対象—文乃至語—の価値に関して、これを社会的に構成された言語システムから導出されるとする言語学的アプローチと、逆にこれを言語対象に内在的なものであり、個々の話し手から導出されるものとする心理学的アプローチとがあるが、両者は通時的概念で結びつけられるという。また、発話に際してジェスチュアが同時に生起しているということは、話し手が同時に2つのタイプの思考、すなわち、統語的（文節的で線形的）な思考と類推的（包括的で統合的）な思考に関わっていることを示唆しているという。つまり、言語行為は統語的な思考とイメージ的な思考との統合であり、このような統合がイメージ的な特性と統語的な特性との相互浸透の形で行われる。ジェスチュアと文とは深層時間の初期の段階では同一の形式で存在しているが、この段階の後、文が発達していく中でそれぞれが特定の位置を占めるようになるのだという。

Clark,H. と Clark,E.（1981）は、文を複雑にする要因を幾つか示しているが、その要因の1つにある1つの文全体を別の文の中に割り込ませることが可能であることから複雑な文が生じる場合をあげている。すなわち、文の命題構造は文の裏にある核となる考えを作り上げる事物、状態、出来事、事実を示すために用いられ、命題それ自体は表層構造には存在しないため、文は必然的に命題を明確なものにする語、句、節の複雑な連鎖により構成されるのであるという。

Thom,R.（1977）は、全ての対象、或いは全ての物理的形態は、内的変数の空間M上の力学系のアトラクタCとして表現することができ、こうした対象が認識されうるのは、それに対応するアトラクタが構造安定な場合に限られると考えている。そして、形態形成の過程はカタストロフと呼ばれ、外的変数の空間P上に描かれること、構造安定な形態形成過程は全て、P上の構造安定なカタストロフ或いはそれらのシステムによって記述されること、自然の過程はすべて構造安定なクレオドに分解され、クレオドの集合とそれらの位置関係を制御する多次元構文法が意味モデルを形成することを挙げ、クレオドがこの多次元言語の単語であるとすると、この単語の意味はそれに対応するアトラクタとそれらのアトラクタの関係するカタストロフ大域的トポロジーに他ならないとしている。

長尾ら（1999）によると、統語解析とは、ある終端記号（実際の文に現れる記号、自然言語ならば個々の単語である）列を入力として与えられ、何らかの文法（統語論）に基づくその記号列の統語構造を出力として作り出す過程である。各統語構造を作る手順として、下降型、上昇型、左隅型などの方法があるが、これら3つ

の手順が作る構造は、下降型が最も大きく、上昇型が最も小さく、左隅型は両者の中間である。下降型統語解析及び上昇型統語解析と左隅型統語解析とを人間の心的情報処理過程との近さに関して比較すると、左隅型統語解析の心理的実在性が最も高いと考えられるという。これには2つの理由が考えられるが、その理由の1つは、下降型統語解析と上昇型統語解析でスタックが長くなる場合必ずしも人間にとって処理の困難が生じるわけではないが、左隅型統語解析においてスタックが長くなり作業記憶への負担が大きくなる場合と、人間にとって処理が困難になる場合とが似通っていることによる。2つ目の理由は、それが実時間の計算であることによるという。一般に実時間とは、入力が終わってから単位時間の内に処理が完了するという意味である。統語解析の場合には、構文木の各部分木の最後の終端記号が入力されてからその部分木の処理が終わるまでに単位時間しか要しないということである。人間は聞いた(読んだ)単語を以前の単語列とほぼ即座に関係づけて理解しているようなので、人間の言語処理過程は実時間と考えられるという。左隅型統語解析が実時間の計算であるのは、各入力記号に対応する計算が単位時間で行われるからであり、1個の終端記号が入力されることによって具現化される局所木は、その記号（の左側の入力位置）を第2引数としてもつものであり、そのような局所木は、各構文木の中に1個しかない。これに対し、下降型統語解析では、左枝分かれの深さに比例してスタックを延ばすため、左枝分かれ構造の最初の終端記号の入力に応じて必要になる計算時間に上限がなく、左端の部分木の処理が単位時間では行えない。また上昇型統語解析では、右枝分かれの深さに比例してスタックが長くなるので、終端記号が入力されてからそれを右端に持つ部分木の処理が終了するまでに右枝分かれの深さに比例する時間がかかるのだという。

2-3．発話と思考及び意識化過程へのアプローチ

Gulick,D.(1992) は、カオスを理解する上で必要とされる写像の繰り返しという数学的手法を紹介している。ここで扱われている周期点と写像は、ある関数に初期値を input し、その後特殊な操作を行うことによって最終的に収束する数列が展開してくる性質のものである。Devaney,R.L.(1997) は、このような反復過程はさまざまな力学系において見ることのできる現象であるとしている。力学系の一例である微分方程式についても、さまざまな形で反復過程が関わってくるという。例えば、微分方程式の解は時間の連続関数であるが、この解を離散間隔で見た場合には、これを反復過程と捉えることができる。また、時間を独立変数とする3次元の1階微分方程式では、求める解は時間をパラメータとする空間内の曲線である。常にというわけではないが、これらの曲線は与えられた空間内の断面と何度も交差することになる。このように曲線と断面との交差点を次々に決定していく反復過程により、方程式の解を求めることができるという。力学系の全ての軌道を描く1つの簡潔な方法に系の相図(phase portrait)がある。これは軌道線上の絵であるが、固定点を黒丸点で、軌道に沿ったダイナミクスを矢印で表現したものである。また、このような反復過程により描き出される軌道にはいくつかの種類があり、その1つが固定点である。これは $F(x_0)=x_0$ を満たすような点 x。であり、方程式 $F(x)=x$ を解くことにより見いだされる。つまり、$F(x)$ のグラフと直線 $y=x$ の交点がそれである。固定点には吸引的固定点と反発的固定点とがあり、微積分学によって非線形関数の固定点が吸引的か反発的かを区別することができる。その他に周期点があり、この点 x_0 は、ある $n>0$ に対して、$F^n(x_0)=x_0$ となる。これらの点とある x_0 の軌道は、いずれも関数 F と直線 $y=x$ のグラフから視覚的に明確な形で解析することが可能である。今、与えられた一

つの点x_0の軌道を求めるとする。まず、関数Fのグラフに直線y=xを重ね合わせ、y=x上の点（x_0, x_0）からFのグラフに向けて鉛直線を引く。ついでその鉛直線とFのグラフとの交点から直線y=xに向けて水平線を引く。この作業の繰り返しによりx_0の軌道が幾何学的に表現されるという。さらに、Devaneyは力学系のカオス的振る舞いを理解する上で最も有用な方法の1つである記号力学に触れ、この概念を導入することにより特定の2次関数で見た複雑な振る舞いを、一見全く異なる力学系に変換する手続きについて述べている。まず最初に、ある2次関数の力学系を実現する空間としてのモデル系である記号列空間に、モデル写像を導入する。この導入手続きが推移写像という操作であるり、ついでこの力学系と、その軌道がある2次関数のダイナミズムの生じる区間から決して出ないような点の集合上でのその2次関数とを、両者の同相写像を提示することにより示すことができるという。このとき、同相写像SがQの軌道をモデル写像の軌道に変換しているのであるが、逆にSのインバースはモデル写像の軌道をQの軌道に変換しているので、Qの軌道とモデル写像の軌道とは一対一に対応していることになるという。Sのこのような同相写像は、明らかに異なる2つの系が実際には力学的に等価であることを示しており、このような写像を特に共役写像と呼ぶという。鈴木の、文法は心理的なものであるとの考えは、Chomskyのいう言語能力を指しているものと思われる。Slobinは「自己教示」としての操作の原理を主張し、子供の自己調節に関わりある言語の働きについて言及しているが、これは言語と思考との関係についても重要な示唆を与えるものである。McNeillは、思考と言語との連続的な関係—ことばの産出と理解について、通時的で統合的な視点からの見解を述べ、考える（理解する）こととことばを話すということは1つの連続体上に横たわっており、変形の連続的な過程が両端を結合しているとしている。さらに、この連続体は時間の中に存在し、より初期の部分がより後期の部分へと変化していくような、現実的な連続体であるという。注目すべきは、言語活動における時間についての論述である。McNeillは”深層”時間と”表層”時間の両者は必ずしも同じではなく、深層時間とは文が内的に発達するための時間であり、思考が急あるいはゆっくり継続して変形を受けるようなものであるとしている。単一の言語活動が単一の心理状態の変化を観察可能な最小の時間単位であり、また我々の言語行為が文法的に適格か否かの厳密な基準を保つ最小の時間間隔の1つであると推測している。よって彼は、心理言語学の対象はこのような深層と表層とを結ぶ「変形の連続的な過程」であり、それは私的かつ連続的に流れていく個人の思考が公共的かつ伝統の産物である社会的慣例—言語自体—と如何に関係しているかを研究する科学であると主張する。この時間という概念に関しては、発話とジェスチュアの同期性に着目し、さらに興味深い理論を展開している。発話に際してジェスチュアが同時に生起しているということは、話し手が同時に2つのタイプの思考、すなわち、統語的（文節的で線形的）な思考と類推的（包括的で統合的）な思考を行っている証拠であるという。ところで、ClarkとClarkは文の複雑性の原因について統語規則との関係から述べていた。また、Thomはカタストロフィー理論を用い、構造安定性と言語との関係について言及している。この主張から、言語の理解に力学系のアイデアを導入することの有効性が推測される。また長尾らによる言語情報処理の立場からの主張では、統語解析の各手法と左隅型統語解析の心理的実在性について有効な示唆が与えられた。長尾らによると、左端（文頭）から順次語が入力され、その都度根節点まで上昇して処理する左隅型統語解析が人間の情報処理機構に最も近く、語の時系列的配置を左から順に入力し、そのつど根節点までさかのぼり処理していくというメカニズムに近い働き

が、実際の人間の内的な過程において行われている可能性が窺われる。以上の各主張と、Gulickの写像の繰り返しに関する論述、及びDevaneyが紹介している（吸引的，反発的）固定点、周期点、分岐がy＝xという直線との関係から、言語活動を複雑な振る舞いをする力学系と捉え、その際に運用される統語規則ないしは文法というものを仮に相同写像あるいは共役写像の操作と考える。発話の意図が存在する力学系と、統語規則により並べられた意図の表現たる文（語の時系列）の力学系は一見全く別のもののように見えるが、文法の共役写像のはたらきにより、相互に全単射で相同な関係をつくることが可能になる。その場合、直線y＝xが何を表し、どのような役割を果たしているのかを吟味する必要がある。カオス力学系におけるこのような数学的性質が、現段階において、統語配列と意図との関係に最も近いと考えられるアイデアである。発話のメカニズムとこれに伴う思考の流れ、意識化過程に関する数理心理学的解明には、この方向からの考察と検討が必要である。

3．子どもの言語学習と思考の発達

これまで本論では、言語は社会・文化様式が最も高度に集約された記号体系であり、従って言語を発話することは、その人の生活圏にある社会的・文化的様式を取り込むことにつながること、さらにこうして社会的文化的様式を取り込むことが自己形成過程なのであると主張してきた。

この視点から子どもの発達過程を再検討すると、子どもは言語を習得することによって、彼らの育つ環境を取り入れていくのであるから、習得すべき言語素材の性質、学習時期、学習方略のあり方によって、彼らの自己形成の性質、程度に差が生じてくる可能性がある。少なくとも、その文化的水準のより良いシステムを素材として提供されることにより、彼らの自己実現の水準は高まるであろう。

川口は、この問題を言語習得の素材・システム習得と、これによる思考・行動様式の形成との関係、つまり早期により精密な基本的言語システムを習得することによって、基本的思考様式が形成され、習得されるであろうと考え、この問題を文献的・理論的に検討した。

3-1．言語と思考

子どもはほぼ生後18カ月頃らか言葉を話し始め、その後短期間の内に、爆発的にこれを獲得していく。子どもがこの時期に急速な言語の獲得が可能な理由については、幾つかの説明がなされているが、現在では基本的には生得的に言語能力が備わっており、これがこの時期に爆発的に展開されるのであろうという考え方が有力である。但しこれは言語表現様式を生得的に備えていると言うことではなく、言語習得能力が生得的に備わっているということであり、それぞれの言語表現様式は生後総て獲得せねばならない。言語は既述の通り、社会的・文化的様式の記号体系ともいうべきものであるから、これを習得することはその社会・文化様式、つまりこの様式・システムを取り込むことであり、この取り込みによって自己が形成されていくのだと考えることができる。個人にとって、それは人間であること、或いは人間になることの必須条件であり、このシステムを駆使して、対人的働きかけを行い、思考し行動することになる。このような事実を考慮すると、言語の獲得は、人の思考行動様式の形成と不可分離の関係にあることが分かる。

ところで、これまで言語と思考の関係については、その優先順位について研究者間で見解が異なり、幾つかのモデルとそのモデルの妥当性についての論争が行われてきた。ここでこの論争を簡潔に述べると、個人の発育において思考が先行し、この思考が言語化されるのだという見解と、言語が獲得されることによって思考が可能となるのだという見解に二極化される。前者の根拠、或いは前者による後者に対する批判

乃至反論は、基本的には「人類の発達史的に見て、言語の発生以前に思考が可能であったに違いない」というものであり、また「何らかの理由で、言語の獲得ができなかった個人にも、思考が存在する」というものである。しかしこの反論は言語のない段階に現在のレベルの「思考」概念と「言語」概念を持ち込むという誤りを犯しいるのだといえる。言語と思考は不可分離の関係にあり、現代の既に高度化した世界に出生する個人は、この高度化したシステムの記号体系である言語を獲得することによって、思考様式を獲得し、一方こうして可能となった思考は、さらに次の言語的システムを生み出していくのだと考えるべきであろう。これが本論における筆者らの基本的見解である。ともかく以下に思考と言語の関係に関するこれまでの主要な見解を概観しておくことにしたい。

3－2．言語の相対性仮説

思考と言語の関係について、最も注目すべき見解は、Sapir－Whorf 仮説であろう。この仮説は「言語は思考を規定する」という簡潔な言葉によって述べられる。しかしこの仮説がどの程度の強さで言語が思考を規定するのかについて明確に述べられてはいなかったために、その後の誤解と論争を引き起こしたようである。Penn, J. (1980) は、この問題を Humboltd, W. の言語に関する見解にまで立ち帰って、史的に検討を加え、この仮説を、思考が言語に依存する程度に関して「強い仮説」と「弱い仮説」に分けて処理する必要があると考えている。つまりこれを「強い仮説」として理解するならば、この仮説は思考が完全に言語に依存し、これに規定されると述べていることになり、一方、「弱い仮説」として理解すれば、思考は言語に何らかの影響を受けるものである、と言うことになる。Penn はこの２つの立場を比較して、「強い仮説」は生得的思考と言語とが神や超人的なものによって付与されたものだと仮定しない限り、説明不可能であり、「弱い仮説」は Brown, R.W. と Lenneberg,E.H. (1954) の実験から支持可能であると述べている。つまり Brown らの実験では、被験者にある特定の色を区別する「名称（言語）」が用意されているか否かによって、実際上の色の識別に差が見られ、その識別用の言語を持っている場合にはその色の再認確率が高まるので、思考・行動に影響する意味カテゴリーの存在が確認されるのだという。さらに Brown (1957) の実験では、文法に内在する意味カテゴリーが認識に影響を与えることを示すという。

これに対して幾つかの反論も提出されている。高野 (1998) は、Cole,M. と Scribner,S. (1976) の研究を俎上にせて、彼らの実験は先の Brown らの実験と本質的に類似したものであるが、その再認確率の高まりは、意味カテゴリーによるものではなく、単に再認記憶の成績向上現象に過ぎないと述べている。文法カテゴリーの効果についても、Bloom,A.H. (1981, 1984) は実験ミスであるとしてこれを否定している。そして言語を持たない失語症者や子どもが思考を行っていると見做し得る例は多く、また正常成人でもイメージによる非言語的思考を行うことから考えて、言語と思考とは相互作用はするが、それぞれが別の認知プロセスであり、言語の違いが思考の能力に大きな差異をもたらす可能性は低いと述べ、言語相対性の妥当性を疑問視している（もっともここで述べられている「非言語的思考」は、筆者らの考えでは、所謂「思考」とは言えないものである。この問題については、いずれ別の論文で議論することにしたい）。これに対して、Vygotski,S. (1969) も思考と言語の関係について言及しているが、言語の発話は元来社会的なものであり、外的言語を内的言語に移行することによって思考が成立するのであり、認知は言語が中心的役割を果たす社会化の中で発達するものであると主張している。

以上吟味してきた通り、思考と言語の関係については、その優先順位について見解が分かれ

ている。筆者らの見解は、Pennのいう弱い仮説とVygotskiの社会的な性質を持つ外的言語言語の内的言語化を思考と見なす見解に近い。そして外的言語はその言語圏の人々が長い歳月をかけて作り出した社会・文化様式を符号化した記号体系であるから、言語と思考とは相互関係を持つ。そしてこの関係は筆者ら（1998）が先に提出した「自我－自己－世界連続体」上で、世界が構成され、一方自我がそれを取り込むことによって自己が形成されていく過程として位置づけることができる。

3－3．情報処理スキーマ

この視点から問題を整理する上で、Seltz,O.（1932）の予見図式のモデルが参考になるだろう。Seltzは思考の類同原理を強調し、思考、特に問題解決は既得の知識によるという思考の予見図式を提出している。彼によると思考は統一的な特殊反応の体系であり、一種の獲得されたパターンの利用によるものだという。つまり問題事態に直面すると、これに相当する既得の知識の中から該当するパターンをこれに当てはめることによって解決すのだという。文章完成法のような統語的な課題においても同様のメカニズムが働くという。

これは所謂思考のスキーマの獲得の問題といえよう。戸田（1980）は、人間には資料情報から作用スキーマを作るための基本的スキーマを生得的に持っており、こうして作り出された作用スキーマはさらに次の作用スキーマを作り出すことによって、効率よく情報を処理可能にしていくのだという。子どもの急速な言語の獲得も、生得的にほぼ完成した言語処理スキーマ（基本的スキーマ）が音や概念を結びつける資料情報を獲得することによって、所謂作用スキーマを完成させていく過程であると考えている（これはChomsky,N.（1960）の生成文法理論における言語能力と言語運用の概念の関係の符合するものといえる）。そこでは「言語理解」は言語理解スキーマの制御により、概念スキーマが相互作用する過程であると考えている。従ってこうして情報処理スキーマが発達しなければ、どんな資料情報も消化することはできないので、この情報処理スキーマの発達を促進させる必要があり、これが教育の主要な指命であると述べている。

このように見てくると、思考を成立させる言語の教育と学習は、戸田のいう情報スキーマに相当する文法的（統語的）図式の獲得を効率的且つ積極的に進めるものでなければならない。従来、子どもに対する言語学習は子どもの自然な獲得に任せる傾向があり、初期学校教育においても、その教材は必ずしも思考を積極的に発達させることを目的とした論理性・整合性のある統語法が意図的に選択されていたとは言えないものであった。子どもの心身の発育、知識の受容の準備性は尊重されねばならないが、この準備性も学習素材の質、教育方略によってかなりの自由度を以て変わり得るものであり、促進し得るものである。志村（1985）の実験では、小学校初年度の2クラスの学童の内、一方のクラスでは授業中、論理的関係を示す統語的文章を、幾種類か用意して、この文章を理解させた後、この各文を前件と貢献に分割し、カードに記載して、前件を教師が読み上げ、それに続く後件を生徒が拾うという一種のカルタ遊びをさせ、もう一方のクラスではこのカルタ遊びはしなかった。そしてその次の時限にカルタ遊びで使ったのと同じ統語的関係を示すが具体的内容は異なった場面を描いた絵を上述の2つのクラス生徒達に提示して、その絵に表現された内容を、「これは何をしているところですか」と質問して答えを説明させると、カルタ遊びをしたクラス生徒は、カルタ遊びで用いた既得の統語的表現の中から適切な関係を選んで説明することができたが、カルタ遊びをしていなかったクラスの生徒はその成績が低い。この結果は、習得した統語的表現が事態を正しく理解し、それを表現する手段として役立っていることを示すものであり、この関係を学習することによって

子どもの知的発達、思考行動様式の準備性も促進され得ることを示唆するものである。
Bernstein,B.（1971）によって示された、子どもの家庭教育における2種のコミュニケーション方略、「制限コード」と「精密コード」がもたらす差異も、上述した効果の具体的例証とも言えよう。

4．言語表現様式と世代間思考行動様式

上瀧（1999）は、自己が社会的・文化的様式によって形成されるならば、こうした様式の内でも言語は、最も高度な様式であると考えられるので、世代間で社会的・文化的様式が変遷するにつれて、用いる言語表現も異なっているはずであるし、それに伴って形成される自己の性質も、思考様式も異なって来るであろうと考えた。世代間で思考様式、行動様式、言語表現は常に変化いており、その差異は、特に若者の風俗に際だって現れる傾向がある。そこで上瀧は、この問題を文献的・理論的に検討する一方、若者言葉の実態と、その表現様式（言い回し）にどのように現れているかの実態調査を行い、さらにそれらの表現様式が、若者のどのような対人的・内面的心理状況の表現であるのかについての考察を行った。

4－1．言語と思考・行動様式

言語様式と心情・思考様式の関係及びその世代間効果について考えてみると、言語は我々の生活に密着したものであることが分かる。例えば、我々は思考をする際も多くのものを言語に頼っている。言語は単なるコミュニケーションの手段ではなく、その使い手の生活様式、行動様式、思考様式を集約して記号化したようなものだといえる。つまり、言語と思考の間には何らかの関係性の存在する可能性が示唆されるのである。本論では先ず文献研究を通してこの問題を検証し次いで、現在の日本語の中でも最も注目すべき現象の一つといえる「若者言葉」を取り上げ、若者言葉の表現形態の特徴と、その話者である若者の思考・心情の関係について実証的分析と考察を行った。

Fishman,J.A.（1974）は、言葉による交際における変異の社会的パターン化をいかに記述し、或いは計測すれば良いかについて、言語社会学的立場から報告を行っている。Fishmanによれば、それぞれの研究はその研究計画、目的によって言葉行為と言葉事件の詳記及び利用の仕方がさまざまに異なってくるものであるという。また言葉行為と言葉事件のレベルにおける数多くの言語社会学的データを考察した結果から、ある種の話し手達の間では他の話し手達の間でよりも「会話」における変異がより一般的に起こり、よりさまざまな割合と分布とを示すという認識が得られたという。これは言葉共同体において、会話者が如何なる時点においても、彼らの間に存在する役割関係を認識しているからだという。たとえば、王と臣下の役割関係は店員と客の関係より普遍的な権利と義務関係の強調を保つだろう。そしてこのとぎ集団の成員たちが相互に同一の集団員であり、互いに負っている権利・義務、役割関係を認識していることを示す方法の一つは、言語の表現方法、つまり言葉を適当な形で変化させることであるといえる。役割関係以外にも時と・場所という要因が言語の変種を招く要因として挙げられる。店員と客が時と場所によってはお互いに友達、親あるいは同一政党員としても交際可能であり、その時に使われる言語は店員と客としての状況で使れる言葉とは恐らく異なっているはずである。一方言語社会学において、これら3つの要因が全体として極めて重要であることを証明する社会的状況が存在するという。柴田（1978）は、日本語における集団語は、隠語、職業語乃至専門語及びスラングの3つに分け得ることを報告している。また、集団語を分析する際に大切な視点は、それが隠語、職業語、或いはスラングのいずれとして使われているかを見極めることであると言う。そしてある集団を分析対象とするときに、その集団中で、集団語が

どのように使われているか、例えば隠語はあるが、職業語やスラングはない、と言ったようなことが分かれば、その集団の性格について大体の見当をつけることができるという。さらにどういう事柄が隠語の対象になっているかが分かれば、集団の内情は一層はっきりする。従って隠語、職業語、スラングという概念は、集団の内情を知る重要なキーワードであるといえるのだという。このように言語が単なるコミュニケーションの手段ではなく、何か大きな背景の上に成り立っていることが察せられるが、その内で最も深い関わりを持つと考えられるものに人間の思考がある。人間の思考と言葉の関係についてはSapia－Whorf仮説が有名である。Penn,J.M.(1972)は、この仮説を論評して、この仮説には言語は人間の思考に影響を与えるという、いわゆる《弱い仮説》と言語は人間の思考を決定づけるという《強い仮説》の二つの解釈の仕方があると述べている。Sapia,E.（1921）は言語を「人間の心的または『精神的』構造内で、十分に形成された機能的体系」であると述べている。また、言語は個人に内在化された体系であり、ソシュールの用語法に従えばパロールの産出を支配する体系であるのみならず、一つの文化の構成員によって共有され、合意によって成り立つ体系、つまりラングであると述べているが、ラングの内在化は、脳内過程において完遂されるものではないと主張している。また、Whorf,B.L.(1940)は自らの仮説を「相対性理論」と呼び、人間の言語的背景が異なるので、その言語で世界異なった見方をしていると考えている。そして彼らの仮説の証拠として、特にホーピ語からの言語的証拠を何度も引用している。Whorfはホーピ語と西洋諸語の「数」「量」「周期」「時制」「持続」「強度」の表現について比較している。Whorfは文化的な基準と言語的なパタンの間には関係があるが、相関関係とか、際立った対応関係というものはないとしている。しかし、「言い回し」というというものが文化全般と密接に結びついていることがあるし、この結びつきの枠の中でとられる様々な言語的反応と様々な文化的発達の間には何らかの関係が見られるという。西洋諸語にみられる、形式プラス無定形の項目、すなわち「資料」という言語的二公式とか、比喩を好む傾向とか、想像的空間とか、客体化された時間とかに適合するような幾つかの特徴を提示し、それが中世では、多くの発明や、産業、貿易、スコラ哲学や科学思想、産業や貿易での測定の必要、いろいろな品物を扱う規格、時計の発明と「時間」の測定、記録や会計、歴史、数学の発達ならびに、数学と科学の共同関係に有用に働いたのだという。ところで言語は自己規制が難しく、それが流行語など言語変種を生む要因の一つとなっている。一方、言語と思考とが密接な関係にあることから、他人の言葉表現様式を取り入れることによって、他人の思考様式もその言語と一緒に取り入れることにもなる。このため集団の言語を探ることによって集団の内情もまた理解されることになる。

4－2．若者言葉の特質

近年、かつてないほど「若者言葉」が注目を浴びている。その理由の一つには、最近の若者言葉が若年層以外の年代層の人には理解困難なほどに特異な表現様式を取っている場合が多いことが挙げられよう。これは、言語が個人的話し手の思考行動様式やその話し手の所属する集団の内情を反映していることを考慮すると、世代間の意識の差が以前に比べて大きく隔たって来ていることを示唆するものといえる。現代の日本の若者集団の内情について考察すると、「友達」はいても「親友」と呼べる人を持っていない人が多いといわれている。携帯電話、インターネット、E－メール、巨大なマスコミといった多くのコミュニケーション手段を使いこなしているように見えるが、「浅く、広い」付き合いが主で、真の意味ではコミュニケーション下手である可能性が示唆されている。そこで、本研究では現代の若者言葉独自の表現様式の中

に、彼らの対人関係に関する意識が如何に隠されているかについての集団内情の考察を行うことにしたい。

現代の若者は他人と深く付き合うことを避け、表面的なコミュニケーションをとることを好むという心理傾向があることが指摘される。そこで本論においては「現代の若者は一定の距離を置いた表面的な対人関係を好み、深く付き合うことを避ける傾向があり、これが若者言葉にも表われている」ことを若者言葉を収集し分析検討することでこれを検証する。

調査対象は現代日本の若年層（10代―20代の年齢層）に特有な言語表現であり、収集方法は、筆者が直接聴取（街頭や大学キャンパス内で交わされている会話）、実際の表現を文書化されたものからの選択的収集（対話や座談会などの実際の会話やノンフィクションの著作者が聴取した会話を書き起こした記述）、創作文書からの選択的収集（漫画、小説などのフィクション著作の中で会話）による。この内、最後のフィクション著作の中の会話は架空のものであるが、著作者が現代の若者の風俗、思考、行動様式に合

分類	ケースナンバー・表現サンプル
1）必要以上にあいまいな表現	6 それもナシの方向で。 7 誰でもいいって感じ。 9 まっしくらてきじゃないっていうか。 12オレ的にはOKだよ。 4 巨人が勝ったようです。
2）責任回避可能な表現	1 すべてが決められているという感じがある。 2 反抗しまくったのもあった。 5 幸せになんないのよ。 8 実感してしまった。 10オリンピックに出てからでもいいなという気持ちもあります。 11つらい練習を休みたいというのはありましたね。 12オレ的にはOKだよ。 3 給食がないじゃないですか。
3）主観的な表現を避けたい表現	1 すべてが決められているという感じがある。 7 誰でもいいって感じ。 8 実感してしまった。 9 まっしぐら的じゃないっていうか。 17私、ビジュアル系駄目な人だから。 13テレビ的に、あの発言はまずいよね。
4）対人関係を軽くしたいという気持ちの表現	15あ、今固まったでしょ。 18アイツたまーにバグってる。 14「お昼何たべた？」「うどん」「うそー」 16それってもうやめたいってこと？

わせて効果的に用いている事を前提として採用した。選択採用基準は、これまで年輩者の表現様式にはなく、現代若年層特有の表現形態との判断された特異性を持つものとした。

収集したサンプルについては採集場所、発話者の性別、職業、階層、年齢、発言対象者（対話者）、会話の状態・文脈について確認し、表現毎にカードに記載し、分類整理した。

4-3．若者の表現形態に隠された心理

現在の日本の若者に特有且つ特殊的言語表現として18サンプルが厳選された。これらのサンプルは、言語表現機能から、状況によっては別の表現にもなり得るものを重複させて大きく分けると、1)「必要以上にあいまいな表現」(5ケース)、2)「自己責任回避可能な表現」(9ケース)、3)「主観的な表現を避ける表現」(6ケース)、4）人間関係を軽くしたいという気持ちの表現」(4ケーる）の4つに分類整理される。

初めに仮定していなかった4）の4ケースについても「人間関係を軽くしたいという気持ちの表現」として分類されるので、これも研究の仮説に近い資料と見なすことが出来る。表は、上記の4分類のサンプル番号と表現例を示したものである。

1）の「必要以上にあいまいな表現」にみられる傾向は、従来から日本語にある婉曲的表現を現代的に発展させたものと考えられるが、ここに見られる表現には、物事を遠回しに表現することにより、明言を避け、人間関係、特にあまり親しくない表面的なつきあいとしての人間関係を円滑に進めるのに効果が隠されているようである。従ってこのような表現を好んで使う若者の心理には、対人関係を表面的付き合いで済ませたいという願望があるものと考えられよう。

2）の「自己責任回避可能な表現」は、例えば「サンプル2」に見られるように、自分の過去の事実を述べたり、自分の主観を述べるとき「～したのもあった」という表現を使うことにより、その責任主体の所在を不明確にし、或いは明らかにしないということに繋がり、責任回避効果を持っていと考えられる。従ってこの表現様式を取ることは、「発話者が発言に際して生じる責任を回避したいという無責任さ、または責任をとるほどには深い交流のをしたくないという願望」が表われているものと考えられよう。

3）の「主観的な表現を避ける表現」では、「自分」を前面に出した表現をすることをなるべく避け、客観的に自分のことを表現することを特徴として挙げることが出来る。例えば「サンプル17」は友人同士のたわいもない雑談から採取されたものであるが、このケースでは、たとえ気楽な会話であっても、その会話のなかに「自分を入れることを避け、その会話に深く介入していくことを避けたいという気持」が働いており、「友人とのコミュニケーションにおいても準部外者のような立場でいたいという気持」がその背景にあるものと考えられる。

4）の「人間関係を軽くしたいという気持ちの表現」には、感情などの人間臭い事柄を、「無機質ではあるが人間の頭脳にかなり近い機能を持つパソコンに比喩に置き換える」ことで、「事柄自体を無機質でドライなものにする効果」を持っているものと考えられる。このような表現を取ることによって、人間らしいこと、例えば人間らしいコミュニケーションを避けたいと考えている若者の姿が考えられる。

以上、得られた4つの表現様式の分類グループには共通して、表面的で、「自己の関与を極力避ける」、「無味乾燥化した人間関係」、「自分と他人とに距離を置いた」表現様式などが見いだされ、こうした現代の若者の思考・行動様式が、図らずも、若者特有の言語表現様式、モダリティとして用いられていることが推定される。

文　献

東洋　学習の現象．坂元昂，東洋（編）学習心理学，東京：新曜社，1－13，1977.

ビービ，L.,M.　卯城祐司，佐久間康之（訳）第二言語習得の研究－5つの視点から．島岡丘（監修）　東京：大修館書店，1998.

チョムスキー，N. 文法の構造．研究社，1960.

ディーコン，T.W.　金子隆芳（訳）　ヒトはいかにして人となったか－言語と脳の共進化－．東京：新曜社，1999.

デュボア，J. 他　ラルース言語学辞典．東京：　大修館書店，1980.

Euler,C.V., Lundberg,I., and Llnas,R. The Development of Language. *Basic Mechanisms in Cognition and Language*,Elsevier Science Ltd, 175－195, 1998.

フィッシャーJ.A. 湯川恭訳　社会言語学入門．東京：大修館書店，1974.

フィルモア　田中春美，船越道雄訳　格文法の原理－言語の意味と構造．東京：三省堂，1975.

秦野悦子　子どもにおける助詞「は」「が」の獲得の研究．　教育心理学研究．**27**（3），10－18，1979.

古池若葉　描画活動における感情表現の発達過程．教育心理学研究，**45**（4），1－11，1997.

Gibbs,F.A. and Knott,J.R. Growth of the electrical activity of the cortex. *EEG Clin.Neurophysiol*., 1949, **1**, 223－229.

グリック，D.　前田恵一，原山卓久訳　カオスとの遭遇．東京：産業図書，1995.

岩立志津夫　日本語児の初期発話における語順．教育心理学研究，29.　（2），11－17，1981.

ヤッフェ，A. 河合隼雄訳美術における象徴性．C,G. ユング（編）人間と象徴－無意識の世界，東京：　河出書房新社，1972，253－304.

ユング，C.G. 野村美紀子訳変容の象徴精神分裂病の前駆症状．東京：築摩書房，　1985.

神保常彦　象徴．下中邦彦編，東京：平凡社，1982，1218－1219.

レネバーグ，E.H.　佐藤方哉・神尾昭雄訳　言語の生物学的基礎．東京：大修館書店，1974.

マクニール，D. 鹿取廣人，重野純，中越佐智子，溝渕淳訳　心理言語学．東京：サイエンス社，1990.

水島恵一　上杉喬（編）イメージの基礎心学，東京：誠信書房，　1983，101－136

宮本忠雄　ムンクの叫びをめぐって－幻覚的意識と創造．精神医学，1966，**8**（8），151－158.

村井潤一　記号化．岡本夏木，清水御代明，村井潤一（監）発達心理学辞典，京都：ミネルヴァ書房，　1995，　130－131.

長尾真，中川裕志，松本裕治，橋田浩一，John Bateman（乾健太郎訳．岩波講座言語の科学8　言語の数理．東京：岩波書店，1999.

西村公朝　祈りの造形．東京：日本放送出版協会，1986.

岡本夏木　記号．岡本夏木，清水御代明，村井潤一（監）発達心理学辞典，京都：ミネルヴァ書房，1995，130.

岡本夏木　清水御代明，村井潤一（監）発達心理学辞典，京都：ミネルヴァ書房，　1995，325－326.

岡本夏木　能記／所記．岡本夏木，清水御代明，村井潤一（監）発達心理学辞典，京都：ミネルヴァ書房，　1995，　538－539.

岡本夏木　子どもとことば．東京：岩波書店，1998.

小保内虎夫　記憶・思考．東京：中山書店，1961.

オクサール，E.　在間進訳　言語の習得．東京：大修館書店，1980.

ペン，J.M.　有馬道子訳　言語の相対性について．東京：大修館書店，1980.

サピア，E.，ホーフF,B.L. 他　池上嘉彦訳　文化人類学と言語学．東京：弘文堂，1995.

柴田武　社会言語学の課題．東京：三省堂書

店，1976.
志村真理　論理的パターンの学習と思考過程の展開．金沢大学教育学部教育心理学研究室昭和58年度卒業論文，1985.
鈴木情一．幼児の文法能力．福沢周亮編．子供の言語心理２　幼児のことば，東京：大日本図書，1987，141－179.
スロービン，D.I. 心理言語学入門．宮原英種，中溝幸夫，宮原和子訳．東京：新曜社，1975.
高野陽太郎　言語と思考．大津由紀雄（編）認知心理学３言語，東京：東京大学出版会，245－259，1996.
トム，R. 構造安定性と形態形成．彌永昌吉訳東京：岩波書店，戸田正直　記憶とは何か．数理科学201，1980.
フェスタ，F.　田多井吉之助訳考える・学ぶ・記憶する．東京：講談社，1990.
ヴィゴッキー　柴田義松訳　思考と言語．上、下　東京：明治図書，1964.
Wirth,J. Symbol. In J.Turner. The dictionary of art,New York: Grove's dictionaries Inc, 1996，163－168.
山岡哲雄橋本圭子池田妙子　情操教育と自己実現－文化様式の学習としての情操－．金沢大学教育学部教科教育研究，1990，26，79－88.
山岡哲雄、川平美根子、尾坂由紀言語学習における「臨界期の問題」－第二言語の学習に関する心理言語学的研究－．金沢大学教育学部紀要（教育科学編，44，277－288．1995.
山岡哲雄　自己形成と自己実現．平成９年度教育心理学講義録．1997.
山岡哲雄・金西美由紀・佐藤登　自己乃至　意味空間の構造に関する研究Ｉ．金沢大学　教育学部紀要（教育科学編），47、123－136、1998.
山岡哲雄、広瀬智子、市川恭輔　有機体の自己調整と情動安定に関する研究．金沢大学教育学部紀要(教育科学編)，47、113－121、1998.
山岡哲雄、佐藤　登、須江昭子、川口悦子、市川恭輔、木元真由美、斎藤彩奈　自己乃至意味空間の構造に関する研究II—意識体験の形成とその表出について—．金沢大学　教育学部紀要（教育科学編），48、41－56、1999.
山岡哲雄、市川恭輔、斎藤彩奈　、木元真由美、佐藤　登、川口悦子、須江昭子　有機体の自己調整と情動安定に関する研究II—ストレス処理について—．金沢大学教育学部紀要（教育科学編），48、57－71、1999.
善光みな　象徴の定義と象徴表現の心理学的研究．金沢大学教育学部教育心理学平成10年度卒業論文，1999.